震災復興の今 巡る旅

研修の愛知淑徳大生 観光パンフ制作へ

東日本大震災から四年半がたった被災地の現状を伝えようと、愛知淑徳大の学生が、大学の夏季研修で八～九月に岩手、宮城両県を訪れた記録を観光パンフレットにまとめる計画を進めている。震災が風化するのを防ごうと、学生の視点で被災地の今を発信する。（社会部・市川泰之）

「現地に行って初めて、被害の大きさを実感した」「考え方が変わった」―。

名古屋市千種区の愛知淑徳大星が丘キャンパスで十日、学生五人が写真を見ながら、被災地で感じた思いを振り返った。

研修に参加したのは交流文化学部の二、三年生計十四人。被災地に行くのは全員が初めて。八月三十一日から九月四日まで、岩手県陸前高田市や宮城県気仙沼市など甚大な被害が出た地域を回り、漁業や商店街の関係者らに復興の歩みを聞いた。

二年生の玉置(たまき)有香さん(二〇)が参加を決めたのは、就職活動でのアピール材料にでもなれば、という軽い気持ちだったという。しかし、気仙沼市のまちづくり団体で働く根岸えまさん(二三)の話を聞き、考えが変わった。

東京の大学を卒業した根岸さんは、大手企業の内定を蹴り、縁のない気仙沼で働く道を選んだ。「本当にやりたいことは何なのか、自分を見つ

め直したら、人のために働きたいと思った」。熱い言葉が、玉置さんの胸に迫った。「こんなすごい人がいるんだ」。就職以外の選択肢も視野に入れ、将来を考えるきっかけになったという。

研修を企画したのは、中部日本放送（CBC）の元テレビマンで、昨年春から教壇に立つ林大策准教授(四七)。CBCで二十二年間、報道記者や番組企画を担当していたが、二〇〇三年、知的障害者が働く栃木県のワイン工場を見学し、地域活性化やまちづくりに関心を持つように。「もっと泥くさく現場とかかわりたい」との思いを強くし、同大の教員公募に応募した。今回の研修も「若い学生に現場を生で見てほしかった」と企画したという。

制作を始めたパンフレットには、学生が五日間の研修で感じたことを文章にまとめ、漁業体験を指導してくれた漁師や根岸さんら現地で出会った人たちを紹介する読み物形式にする。写真もまじえ、十月をめどに完成させて現地の観光案内所などで配る計画だ。

震災から四年半がたち、全国的に被災地への関心が薄れている現状に危機感を感じている。林准教授は「学生たちの思いを通じ、被災地の新たな一面にスポットを当てられれば」と話す。

東日本大震災の被災地を訪問した際の活動を振り返る林大策准教授（右から3人目）と学生たち＝名古屋市千種区の愛知淑徳大星が丘キャンパスで

２０１５年9月１６日（水）　中日新聞　夕刊１１面より
この記事・写真は中日新聞社の承諾を得て転載しています。